

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁

キューバローズ

体験版

シナリオ: 順三郎

イラスト: めんだこ

体験版本文54p / イラスト3枚 / 差分28枚

自称最強

サキユノバス

ちゃん!



カップ焼きそばから
召喚されたのは…
純血のサキユバスだった！？

自称最強

サキユバス

ちゃん！

何も知らない無垢な悪魔に
えっちなことを色々教えてあげよう。

純真なサキュバスちゃんは、
どんな淫魔に成長するんだろう？

自称最強

サキュバス
ちゃん！

「ただいま……」
アルバイトから帰宅した俺は
いつものように冷蔵庫を
開けたが、中は空っぽだった。

やむを得ん。
決戦兵器を出そう。



俺のイチオシのインスタント。

『ザ・カップ焼きそば』

濃い濃いイカスミあんかけ麺だ。

熱湯5分！

そこらの安物とは違うね。

「ふふふ、これで仕上げだ！」

真っ白な麵にどす黒い
イカスミソースを袋から注ぐ。
みるみるカップの中は
黒く染め上げられていく。

『漆黒に〜染まる〜俺の晩飯〜♪』

意味もなく鼻歌も
出てくるってもんよ。



すると突然、カップ焼きそばから
激しい黒煙が舞い起こる！

——夜の帳が全てを

漆黒に染め上げる

漆黒こそ美

漆黒こそ永遠——

もくもく

もくもく

「我は高貴なる
純血のサキュバス
我が名はアンジェラ
ここに召喚せり！」

でんんんん！

ででーん！

目の前に突然、赤毛の美女が現れた！
腰のあたりからコウモリのような
羽をひらひらさせている。
膝下からはスケスケの網タイツ。



たわなおっぱいを隠せているのか
どうかも怪しい、ボンテージビキニ姿だ。
なんか頭から黒い角が2本生えている。

「な、何だお前…」

「……………」

俺たちは無言で
互いを見つめ合った。



コホン

目の前のビキニ娘は
かわいく咳払いする。

「ほら、なにか言うことはないの?」

「ん? なにかって」

「目の前にこーんなかわいい
サキュバスが居るっていうのに!」



「お前、サキュバスなのか？」

「ええ、そうよ」

「なんで？」

「なんでって、召喚されたからに
決まってるじゃない」

イカスミソースで召喚される
サキュバスなんて初めて見たわ！
いや、サキュバス自体初めてだけど！
ちなみに俺のイカスミカップ麺は
ハイヒールに踏み潰されていた。
お、俺の晩飯が…。



「ふむ…召喚された…」

「そうよ、高貴な魔族だけが
使える高等魔術。

主従関係を結べる相性ぴったりの
相手が居るところに召喚されるのよ。
そこらの下等なコウモリちゃんには
無理な相談だわ」

アンジェラと名乗った
ボンテージ姉ちゃんは
どこか得意げだった。

「なるほど…。まあ、話はわかった」
「そう、話が早くて助かるわ」





「晩…ご飯？ 何が？ どこに？」
「お前が今踏み潰しているやつ！」
アングジェラは足元を見る。
そこには干からびて粉々になった
カップ焼きそばの残骸だけがあった。
「あなた、こんな粗末なものを食べていたの？」
「粗末っていうなっつっつ！！」
奮発したんだぞっつっつ！！」
自炊の材料を切らして、取っておいた
無けなしのカップ麺を引っぱり
出してきたのはこの際内緒だ。

「ご飯食べたいの？ 出してあげるわ」

ミヤミーン！

アンジェラが短い呪文を唱えると、
胸元からいくつかの物体が
ポトポトとテーブルの上に転がり落ちた。
パン、焼いた肉、革袋に入った何か。
試しに袋を開けてみると、芳醇な酒の匂いが。
コップに注いでみたらワインだった。
今日び、革袋に入れた酒なんて見かけねえな。



(あ…。ヤバ、魔力が…) 召喚を含む異世界転移は大魔法だ。アンジェラは自分の魔力が枯渇する予感に焦り始めていた。
「すまん、腹減ってるから食わせてもらおうぞ」
「え、ええ」

バクバクバク！
俺はテーブルの飯をものの5分で平らげた。学生の食欲なめんな。



「ごちそうさま」

「どういたしまして。」

「それで本題なんだけど」

「本題って？」

「魔族が召喚されたのよ。」

「主従の契約を結ぶに

決まってるじゃない」

「そうなのか？」



「我は、召喚されたばかりで
喉がカラカラなの。
精をちょうだい」
「ふーん。ちなみに
契約しなかったら？」
「召喚魔法の効果が切れたら、
我は元の世界に戻るわね」
「それ、お前が困るんじゃないの？」



ギクリ！

目の前の美女は露骨に焦りだした。

「わ、我は、高貴なる純血の

サキュバスですし？

召喚魔法なんて簡単な

魔法で失敗するなどと——」

「——いうわけにはいかないわけか」

「そ、そうね……」

「さっきの飯の魔法のせいで

余計に魔力がない、と」

「ええ、そうよ。恩に感じて、

忠実なる下僕ちゃんに

なっけてくれていいのよ！」



「そうか、ならば条件がある」
「そうなの。言ってみて？」
「俺に絶対服従の使い魔になれ。
ちなみにこの『世界のお約束』だぞ」

この世界のお約束ってなんだ。
口からでまかせに決まってるだろ。

『世界のお約束』…。
くっ、こんなかわいい
サキュバスちゃんに、
いけないことするつもりでしょ！』



「お前…消えるのか…？(魔力切れで)」
俺はいかにも残念そうに
つぶやいてみせた。

「わ、わかったわ。受諾する」
余裕のないアンジェラは渋々受け入れた。

——我アンジェラ、
汝、ツトム^の絶対服従^の
使い魔になる契約を
受諾する——



その歌うような契約の呪文を耳にして
俺の胸の中に温かいものが
よぎったような気がした。
これが契約ってやつか？





「もう我慢できない。えい」

ビューン！

突如、俺はベッドの上にぶん投げられた。
この女、見た目に合わず
めっちゃくちゃ怪力だ！

「ご主人様、お腹ぺこぺこなの。
哀れな使い魔ちゃんに精をくださいな♡」
そんな蠱惑的なセリフをささやきつつ、
俺の腕をガツシリとつかんだ。
身動きしてもびくともしねえ！



「人間はどこから精が出てくるのかしら。」

口から？ 鼻から？ 耳かしら？」

アシジェラ、いい匂いだな…。

机を挟んで向かい合ってた

ときにはわからなかった、

どこか果物のようななんとも

言えずいい匂いがする。

そしておっぱい、おっぱいである。

俺の手に余るほどの巨乳が

俺の身体の上に乗っかって、

ふにゅんとだ。ふにゅんとしてる！



更には柔らかくてすべすべの
太ももがチンコこすってる！
やべえ、勃起してきた…。

「ねえ、精出して♡ ほらほら♡」

ぐにぐにっ

知ってか知らずか、アンジェラは
俺のチンコを太ももでぐりぐりしてきた。
あー、もう完全に勃ちちまったわ。



「?? 何か、固いものが

当たってるような…」

「俺の、おちんちんです…」

「おちんちん? おちんちんってなーに?」

「俺がもっと気持ちよくなると、

精子が出ます。いっぱい」

さっきから俺は何を言わされてるんだ。



「精が出るのね！」

「おちんちん欲しい！ 見せて！」

「あ、はい」

なんか流れてパンツまで脱いでしまった。
俺のチンコはギンギンだった。



「す、すごい。ビクビクってしてる…」



つん… ビクッ！



指先で触れると反動で
木の枝がしなるように反り返った
チンコを見て、
アンジェラはびっくりしていた。



「これをもっと気持ちよくすればいいのね？
こ、こうかな…」

すりすり…。

「う、うお…」

おそろおそろ指先でこすり始める。
あ、細くてしっとりしてる。
手慣れた自分の右手とは違う、女の子の手だ。

ん

ななっ♡

ん

んん♡

ん

「ツトム、気持ちいい？ 気持ちいい？」

すりすり。

アンジェラは俺の反応を見つめながら強く弱くこすりたてる。

はあっ♡
はあっ♡

「いい…」

手でいじくられる快感を与えられながらの問いかけに、うめくように返すのが精一杯だった。

「ふふ、ツトム、気持ちいいんだ♡」

すりすり。すりすり。
ああ、もう耐えられん。

ビクッ
ビクッ

おっすり♡

おっすり♡

ム

ム

「出して、精をいっぱい出して♡」

「う、うわ、出るー!!」

ビュルルルル!!

ビュルルルルルルルルルル!!

爆発するみたいに射精した。
こんな強烈な射精なんて久しぶりだわ。

ムクッ
ムクッ
ムクッ

!!

「きゃっ!?!」

アンジェラの顔といい手といい
おっぱいといい、体中に精子がかかって
べとべとになってしまった。



「何これ。ドロドロじゃない...。
魔力みたいに煙じゃないんだ。ぺろっ」

て

ん
ビクッ
ビクッ

ん
ビクッ

トロオ...

ん

アンジェラは手についた精子を舐め取った。
そのままコクンと飲み込む。

「喉に張り付く変な味。でもなんかクセになる」

グニッ♡♡♡

ヤッ♡

トロ...

ム

ヤッ♡

トロ...

ム

ぺろぺろ。
アンジェラは
顔や胸に溜まった精子を
丁寧になぐって
全部舐め取ってしまった。

「ごちそうさまでした♡
まだまだ足りないわ。もっとちょうだい♡」

アンジェラは甘えるように
俺にしがみついていた。

髪の毛からさつきかいだ
いい匂いがまた漂ってきた。

ゴクリ。
よし、ここまで来たら、
とことんやってやろうじゃないの。

ギンギンツム

ぷるんっ♡



「手コキなんかより、もっとすごい
方法があるんだけど」
「もっとすごい？」
「いっぱい精が出る？」

「ああ、出る出る」
「ホント!?」
「やってみせて！」
「今すぐ！」
「じゃあ、ここに横になってよ」



ベッドの上に促すと、
アンジェラは恐る恐る
ベッドの上で仰向けになる。
ぶるん！
アンジェラのデカイ
おっぱいが大きく揺れた。
改めて見ると、
おっぱいでけえな！

ドキドキ

アイ
ン
ク
ン

「んで、足を開いて」
「わかった。こう？」
「いやいや、もっと」

がばあ！

両手でアンジェラの
膝を持って思いっきり
股を開いた。

プルッ

ムチムチッ

んぐんぐ

ちんちんイライラさせている
男は短気なのだ。

「ぎゃあ！ 何をするの!？」

「何って、そりゃあ、SEXだよ…」

「SEX……。って、なあに？」

こいつ…。ホント何も知らないんだな。

「男と女でやる、気持ちいいこと」

最近では男同士だったり

女同士だったり色々あるみたいだが、

俺は興味ねえ！

というか、アンジェラは人間ですらないしな。



きょん

ぶる

むちむち

「ふーん…そっか。」

気持ちよくなったら

精が出るんだもんね。

気持ちよくなる方法、教えて？」

「そうだな…。まずは、おっぱいを
見せてくれないか」
「男の人って、ホント
おっぱいを見たがるわね。
魔族の男どももそうだったわ!」
アンジェラがなんだか憤慨している。
やっぱこいつ処女か!。
サキュバスのくせに
何も知らねーんだもんな。

「まあそう怒るなって。
気持ちよくなるにはお互い
裸になるのが一番だから」

にゅんっ♡
にゅんっ♡

「わかったわ。これでいいかしら」
ぶるんっ！

俺の手に余るほどの巨乳が、
仰向けになった重力に
負けて外側に広がる。

しかし垂れることなく
つややかな乳房、ツンと突き出た
桜色の乳首が男心をくすぐる。

ぷんぷん！！

「じゃあ、触るぞ…」
さわっ……。
むにゅん！

「ふにゃ…」
「な、なんだこれ!？」

ふにゃ…

柔らかいってもんじゃないぞ、これ。
触った指がほとんど抵抗なく
そのまま沈んでいく。
絹のように細かい肌が触り心地がよく、
いつまでも揉んでいたい気分。

むっ

むにゅん♡♡

むっ



たっはっ

たっはっ

もみ

もみ

「我のおっぱい、変なの？」

「あ、違う違う。超最高。」

「こんなおっぱい見たことない」

「ふふーん。そんなにいいんだ…」

アンジェラは戸惑った表情で、

俺の両手で自分のおっぱいが

揉まれる様子を見つめている。

「ん… ふっ…」

揉んでいるうちに、
手のひらに収まった乳首が
だんだん固く尖ってきた。
指で摘んでみる。

「ふにゃっ!？」
「ほれ、くりくり」
「あっ、それ、ずるい」

アンジェラは顔を紅潮させ、
刺激から逃れようと身をよじる。
おっぱいがそれにつられて
ぶるん!と震えた。

ぶるん

はむ

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

つきたての餅のように
柔らかいおっぱいは、
周囲を柔らかく
握り込むと、乳首が
ひとりで飛び出てきた。
思わずその先の乳首を
口にくわえてしまう。

はむ。ちゅうちゅ。

くり
くり

「ふあっ…♡」

そんなところ吸っても、
おっぱい出ないよ？」

「おっぱいを

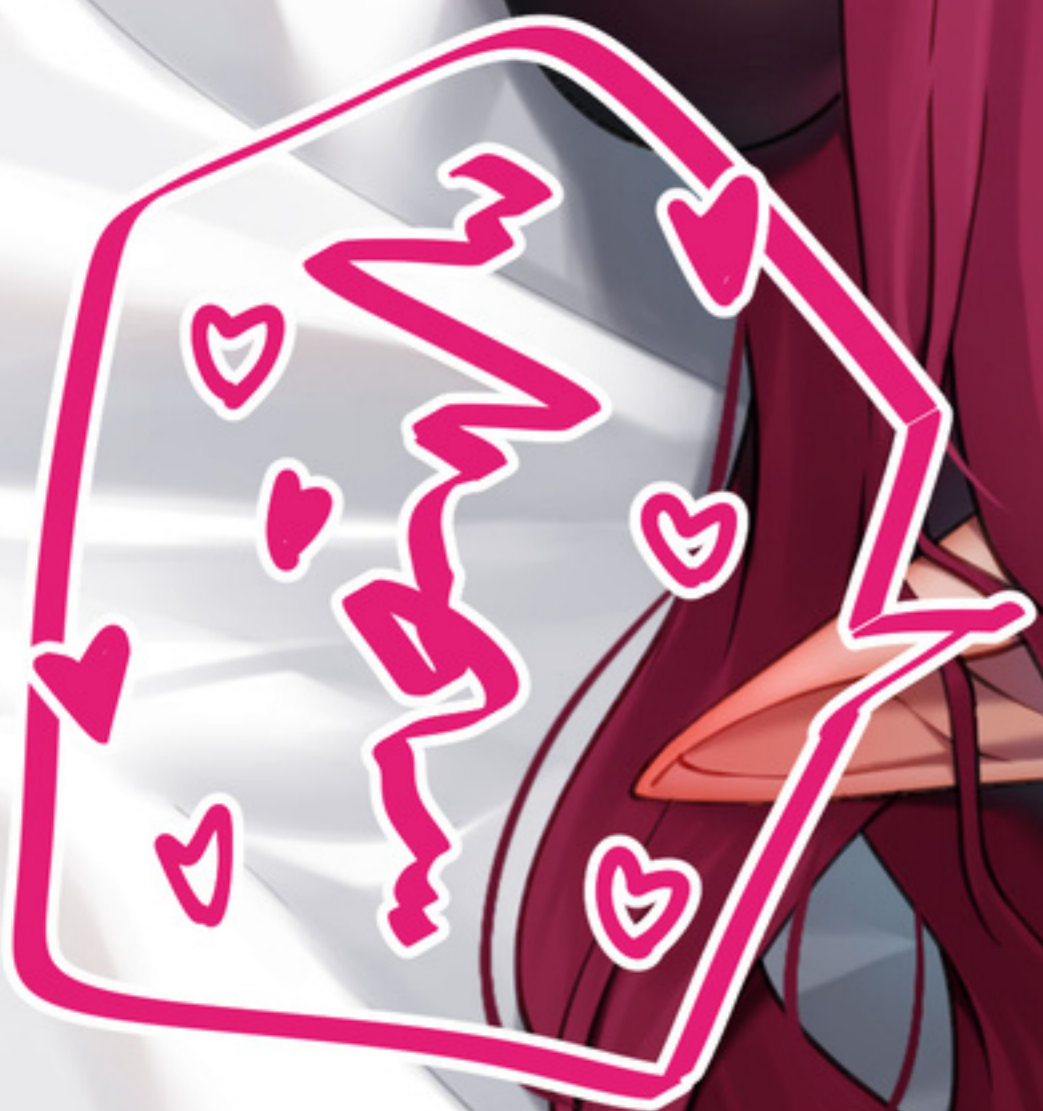
見たら吸いたく

なるのが男だから」

「ふーん、一生懸命に

おっぱい吸ってるの、

かわいいかも」



下半身の刺激も忘れない。
ビキニパンツの上から
縦筋を撫でたり、縦筋の
付け根にあるまだ露出してない
クリトリスを指の腹で
細かく刺激したりだ。

「あん♡ それ、気持ちいい…」

ちゅぽ ちゅぽ

くっくっ

くっくっ

あん♡

あ♡

アンジェラはデリケートな
ところを触れられるたびに
敏感に反応していたが、
だんだん口数が少なくなり、
興奮した息遣いを
するだけになった。
そろそろだな。

ぺちぺち。

俺はビキニパンツの上から
ちんちんで叩いた。

「アングェラ、始めようぜ。

パンツ脱いでくれよ」

「そのおちんちんで、
何するつもりなの？」

ぺちっ
ぺちっ

ゅっ

ゅっ

ゅっ
ゅっ

何って？ そりゃナニよ。

「これから気持ちいいことをするぞ。

今までは準備体操みたいなもの」

「体操？ 体操って何？

食べられるの？」

魔族に体操の概念はなかったかー。

「えーと、まあ、準備。いきなり入れると痛かったりするし」

「そっか、御主人様は痛くならないように準備してくれたんだ。優しい人！」

か
い
ば
っ



がばっ！と抱きつかれた。
よしよししてやって、落ち着かせる。
無邪気な笑顔を見せる
アンジェラの表情とワガママ
ボディのギャップが凄かった。

きゅん
きゅん

するする。アンジェラが
ビキニパンツを脱いだ。
つるん。

アンジェラのおまんこは、
その肉感的な見た目と裏腹に毛が
生えてなくてつるつるだった。

つるん♡

ギンギンッ

ぷるん＝

トロトロ♡
トロトロ♡

まだ誰も男を許していない
女のそこは、トロトロと蜜が
こぼれ出していた。
「じゃ、入れるぞ…」
「いっぱい気持ちよくなってるね♡」

ん
ちんちんをアンジェラの穴の
ところに押し当てると、
抵抗なくぬるりと入り込んだ。
「ふわっ…。入ってくる…」
「うおっ!? なんだこれ!!」

ぐりぐり

ぬるっ

…♡

ぬるっ
13p, 30p, 17p...

やばい。
熱くて、ぬるぬるしてて、
俺から精を搾り取ろうと
グニグニ締め付けてくる。
出ちゃう。出ちゃうって!
我慢我慢…。



一方、アンジェラの方も初めての
感覚に押し流されそうになっていた。

「しゅごいの…。御主人様のが、
身体の中に直接伝わってきてるよ」

熱く潤った女の粘膜が、ぬめぬめと
俺のちんちんを容赦なく

こすりつけ、締め付けてくる。

「あ、タンマ。そんなグニグニ
されると、出ちゃうから…。ね？」

「ダメ、許さない」

ぬるっ♡
ぬるっ♡

ぐにゅっ♡
ぐにゅっ♡

ぎゅっ!!

俺は蜘蛛の巣に引つかかった
虫みたいにアンジェラの手足に
絡め取られ、身動きが取れなくなる。

はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡
はっ♡

「ふわっ！ 出てる！
御主人様あゝ♡」

「うお、出る、まだまだ出る。無限に出る…」

ビュルル！
ビュルル！

アンジェラは自分の身体の中の
優しい衝撃に驚いていたが、
どこか嬉しそうだった。

射精の感覚に恐れ
おののいていた。



של

747

ちゅっ♡

「ふはあ、御主人様、
すごかったの…♡」
首に巻き付けていた腕から開放され、
ようやく俺は動けるようになる。
いつのまにか術も解けていた。

はあ、

とろお…

はあ…

ドキ
ドキ

「サキュバス…
まじやばいって…」
俺がかすれる声で
感想を漏らしていると、
「もしかして、SEXって
すごくいいんじゃない？」
アンジェラは別の方向性で
興奮していた。



「御主人様、もう一回！
もう一回しよ！」

「アンジェラさん？」

始める前にエッチな目で男が
見てくるの、バカなんじゃない？
とか言ってたよね」

「SEXしないなんて馬鹿じゃない？
したほうがいいに決まってるじゃん」

どろろ...

むね...

ウクウク

ぽぽぽ

ぽぽぽ

♡♡♡

あーあーあー!!
めいめい言ってることが違え！

fin